笑進笑明（しょうしんしょうめい）

＜校　訓＞
・学ぶ力
・働く力
・正す力

平群中だより
編集者：吉迫隆志
NO.15
令和6年3月11日

3.11「東日本大震災」から 13年

今年で13年が経ちます。日本にとって観測史上最大の“大地震,,そして“大津波,,一瞬にして大切な家族が、友人が、家が、街が、暮らしが、幸せが、全てが目の前から奪われてしまった方々がたくさんおられます。様々な報道や、何年、何十年経とうが、この惨劇の記事や映像をみると、あまりにもつらくてたまりません。

200人も犠牲が出れば大災害のレベルですが、この震災による死者は、12都道県で計1万5900人、行方不明者は6県で計 2520人に上ります。いまだに行方不明者だけで、2520人とは、東日本大震災がいかに桁違いだったか考えさせられる数字です。

仮設住宅に一人暮らしを余儀なくされた、初老の方の話･･･この大震災で奥さんと息子さん家族（息子さん、奥さん、お孫さん）を失いました。供養のためにと自宅に“ひまわり,,の花を育てられその数も年々増え続けているそうです。また、別の特集記事では、同じように、奥さん（37 裁）、お父さん（77 歳）と娘さんを奪われました。今もまだ娘さんは見つかっておらず、捜索活動を続けておれれます。この他、あまりにも深く悲しいお話がたくさん綴られています。

今年（令和6年）の元旦にも、能登半島地震が発生しました。能登半島地震では、東日本大震災以降では初めてとなる大津波警報が発表され、各地で被害が報告されました。東日本大震災と比べ、能登半島地震では地震の発生直後に津波が沿岸に押し寄せたと言われています。そして避難を始める前に津波が到達したことなど、そのことに強く危機感を強く持ち、今回「津波の恐ろしさ」を思い出すきっかけになってほしいという想いで、東日本大震での悲惨な状況を SNS へ投稿するこ被災者の方もおられます。これらの震災から、私たちが教訓とするべきことはたくさんあります。悲しみのどん底にある方々が復興を目指し、懸命に取り組む中で、人の絆の深さや、人の心の温かさなど、かけがえのないものを得ることができたと語られています。

本日「3.11」に「命の重み」「命の尊さ」について改めて考える日にしましょう。

『頑張ろうな!』」と励まされた「あの日の中学生」

今度は能登で「きっと戻るよ」と元気づける ～東日本大震災13年 あの日から～

能登半島地震で 1000 棟超の住宅が全半壊した石川県能登町。「仮設住宅はどうなるの？」「住むところがない」…1 月 29 日夜。避難所の町立小木中学校で、被災者らがストーブを囲み、口々に今後への不安を吐露していた。輪に加わる宮城県職員の横山零さん　(27)には、気持ちが痛いほどわかった。避難所運営の応援に入って３日目。少しでも勇気づけたい。中学生だったあの日の自分が、心細さを埋めてもらったように。

いつまで待っても迎えは来なかった。同級生たちは親と無事の再会を喜びながら次々と帰って行く…

当時、宮城県南三陸町立志津川中の２年生。１３年前の３月 11 日、教室のカーテンの隙間から、街をのみ込む津波を見た。教室で一夜を明かした。翌朝。迎えに来た親と一緒に帰る友人らの背中をただただ見送った。「取り残されたなあ…」両親も、小学生の妹も、消息はわからないまま。教室の床に段ボールを敷いて過ごす夜。毛布もなく、学校にあった暗幕にくるまった。寒くて、ひもじくて、心細くてたまらなかった。

数日後、小学校に避難していた妹の無事がわかった。父親とも連絡がついた。しかし、母親の行方はわからない。妹は先生がいる小学校、持病がある父親は病院に身を寄せ、それから数週間は一人で避難所になっていた志津川中で過ごした。

「頑張ろうな！」。ボランティアの励ましがうれしかった。炊き出しの温かいみそ汁は、体に染み渡る。ある日、頼まれて物資運搬をしていると声をかけられた。「ありがとう。若い力があると助かるよ」。沈みがちな気持ちが晴れ、率先して手伝うようになった。

１か月以上が過ぎた頃、母親の由美さん（当時４２歳）の遺体が見つかった。近所の人と手をつないで避難中に引き返し、津波に巻き込まれたようだった。

「宿題はやったの？」が口癖の教育熱心な母親。しばしば叱られた。でも、それ以上によく笑う人だった。編み物が趣味で、小学生の頃、教わりながらマフラーを編むと、「上手にできたね」と褒めてくれた。火葬の日。何とも言えない喪失感に押し潰されそうだった。夜、家族に隠れひとり泣いた。その後は、気持ちを吹っ切りたいと卓球部の練習に打ち込んだ。

父親は病気がちで、妹は小学生。「自分がしっかりしなくちゃ」と高校卒業後は公務員になろうと決めた。２０１４年１２月、宮城県庁から内定を得た。「がんばって働くよ」。母の墓前で手を合わせ、報告した。最初の仕事は、三陸海岸に整備された「三陸復興国立公園」の許認可事務。被災した電線の復旧や復興団地の造成の申請に対応した。津波で何もかもがなくなった場所に、少しずつ生活が戻っていくのを実感した。復興への願いは、働く前よりはるかに強くなった。

元日の能登半島地震。失われた「日常」を思い、胸が締め付けられた。上司から応援職員に指名され、二つ返事で引き受けた。「おいしいね」。小木中の避難所で炊き出しの中華丼を手渡すと、被災者の表情がほっと緩んだ。元気づけたい一心で忙しく動き回った。時には自身の体験も交えながら、親身に、でも、できるだけ明るく声をかけた。「安心して暮らせる日がきっと戻って来るよ。」

１週間の応援から戻ると、久しぶりに志津川中に足を運んだ。高台にある母校からは、復興した街の姿が見える。「いろんな人たちが助けてくれたな」。

しみじみと噛みしめた。

「助け、助けられ、人々は未曽有の災害から立ち上がっていく。」（大原圭二）…おわり